

Title	天文語彙：天界第三號附録
Author(s)	海老, 恒治
Citation	天界 = The heavens (1920), 1(3): 9-12
Issue Date	1920-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/159530">http://hdl.handle.net/2433/159530</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 天文語彙

海老恒治 編

(あの部……續々)

**アンドロメダ星雲** (Andromeda Nebula) アンドロメダ座ヌ星の側にある大星雲、肉眼にも微かに見える。直經は月の二倍もある。近世の寫眞に由り之は渦狀をなしてをる事が解つた。赤經〇時三七分、赤緯北四〇度四四分。一秒三〇〇軒の速度で我々に近づいて居る。

**アンドロメダ流星群** (Andromedids) 毎年十一月二十七日頃アンドロメダ座ガー星から輻射する流星群。之はビエラ Biela 彗星と同一軌道を持つて居る。恐らくは同彗星の退化せしものであらう。(ビエラ彗星を見よ)

## い(ゐ)の部

**イオ(Io)** 木星の第一衛星、ガリレオが発見したものの。(木星を見よ)

**イースター**、基督復活祭(Easter) 基督教で行はれる祝祭で最も重要なもの。毎年此日附を曆の上で定める事は昔から基督教國の宗教家及天文學者等の大責任であつた。中世ジュリウス曆から今日のグレゴリー曆に發達した曆學上の進歩は此のイースター問題に負ふ所が多い。現今此日を定める方法次の如し。即ち毎年太陽の春分點通過後に來る満月の次の日曜日をイースターとする。

**いちのへ・なぼぞう** 一戸直藏 青森縣の人、明治三十六年東京大學星學科を卒業、同年米國エルケス天文臺に留學、主に變光星を研究し同卅九年歸朝東京大學講師となる。明治四十四年論文を提出して理學博士となつた。論文は主に變光星に關するもので中に三箇の新發見がある。同四十四年職を辭し雜誌「現代の科學」を發刊した。著作頗る多く我國に於ける天文學普及上大貢獻をなした。

(明治十一年生、大正九年逝)

いつかくじつぞ一角獣座 (Monoceros) バルチユス (Parschius) が一六二四年に使ひ始めた星座でオリオン座の東、大犬座の北、小犬座の南にあり、赤道の兩側に跨つて居る。四等星が四つある許り其他は皆微星であるから餘り目につかない。大犬座との境にメシヤー第五〇番の星團がある。

いてざ射手座 (Sagittarius) 動物圈上の一星座で早くバビロン人にも認められて居たらしい。蝸座の東、鷲座の南、山羊座の西で大面積を占めて居る。二等星二つ、三等星八つ、殊にファイ、シグマ、タウ、ゼータの四星が作つて居る四邊形は目につき易い。(支那人は之を南斗と稱へた)此星座は天の河上にあるので有名なる星雲や星團等が多い。變光星や新星も數多く發見された。學問上から見ても最も興味の多い星座である。太陽は毎年十二月二十日頃此の星座に入つて一月二十二日頃去る。(人馬宮を見よ)

いど緯度 (Latitude) 地球の軌道面に平行した平面で天球を切つた座標(黃道座標を見よ)。地球表面上の位置を表はす爲めに赤道に平行した平面で作

つた座標を又緯度と云ふ。此緯度に二種類ある、一は地表(或は天文)緯度 (Geographical, Astronomical Latitude) と云ひ、其土地の鉛直線と地球赤道面との間の角度或は其土地の水平面上の天球北極の高度がそれである。他の一は地心緯度 (Geocentric Latitude) と云ひ、其土地と地球中心とを結んだ直線が地球赤道面となす角度を云ふ。此二種類の緯度は赤道と兩極とでは一致するが其他では常に地心緯度の方が小さい。之は蓋し地球が廻轉楕圓體なのに原因する。

いど緯度の變化 (Latitude Variation) 地球の廻轉軸が動搖する爲め、世界各地の緯度に周期的變動がある。此理論は十八世紀中頃オイレル (Euler) が論じたが、事實は一八八五年頃獨逸のキュストナー (Kuster) と米國のチャンドラー (Chandler) とが同時に發見した。一八九九年以後國際測地學會は北半球に四箇所の觀測所を置いて緯度變化を測つて居る。我國岩手縣水澤觀測所は其一つである。(水澤緯度觀測所を見よ)

いるか(海豚)座 (Delphinus) 北半球のトレミー星座

で鷲座の東北、ベガンスの西、面積は小さいが、三、四等星が集つて特に著しい。ガンマ星は有名な連星である。毎年九月夕方天頂に來る。

いろ星の色 (Star Colour) 星は皆大體に於て白色であるが、よく見れば幾分青味や赤味を帶びた種類の程度がある。之に由り星を青星、白星、黃星、赤星等に分類する。(夫々の條を見よ)。星の色は其光の構造に由り起るもので詳しい事は分光學で解る。主として其星の霧圍氣の密度や溫度を表はすものである。二重星には赤と青の著しいコントラストを見せるものが多い。例へば白鳥座ガンマ星の様に。此現象の一部分は我等の眼が補色を誇大にするのに由る。

いろしすう色指數 (Colour Index) 寫眞光度から眼視光度を減じた數。これは星の色を數量的に表はすものである。パークハースト (J. A. Parkhurst) の測定した色指數は次の如くである。

星の色	青星	白星	黃星	赤星
分光型	B0	B5	A0	A5
色指數	(-0.3)	-0.21	0.00	+0.23
			+0.43	F0
			+0.65	F5
			+0.86	G0
			+1.07	G5
			+1.30	K0
			+1.51	K5
			+1.68	M
			+2.5	N

いろけしレンズ (Achromatic Lens) クラウン・ハン

ズとフリント・レンズとを組合せて色收差を消す事は一七五八年ドロンド (J. Dollond) が發見した。此發明に由つて古人の遭遇した一大難點を除き去し望遠鏡の口径を増大し得た功績は偉大である。今日の色消法に二種類ある。一は肉眼觀測のためで重に水素ベータ線に調節してある。他の一は寫眞用で水素ガンマ線に調節してある。

いんえいたい陰影帶 (Shadow Bands) 皆し日蝕の

始と終に光の小さい濃淡線條が地上を走るのが見ゆる。之は日光の變化に由る空氣の作用である。(皆既日蝕を見よ)

いんせき隕石 (Meteorites) 流星の中特に大なるも

のは地上に落下することがある。之を一般に隕石と云ふ。物理化學的分拆の結果隕石を二種類に分ける。一は火山岩式のもので之を單に隕石と稱へ他は鐵を主成分とし之を隕鐵と云ふ。隕石も隕鐵も共に大さは一定して居ない。今日最大の記録は北米グリーンランドに落ちたもので重さ卅六噸ある。(流星は見よ)

いんてつ隕鐵(Meteoritic Iron) 前項を見よ。

インドじん印度人(Indus) 南天の星座で一六〇三年

バイエル(Bayer)が發明した。遠く射手座の東南で、毎年九月十月頃夕方低く南方の地平線上に一部分だけ見える。アルファ星が三等星、他は微光である。

いんりよく引力(Gravitational Attraction) 物理學上の原則として二個の物體は相互に引き合ふものである。その力は二物體の質量の相乗積に比例し、距離の自乗に逆比例する。之はニュートン(Newton)が發見し一六八七年著書プリンシピア(Principia)に發表したもので、之をニュートンの法則と云ふ。地上に於てあらゆる物體が落下する事、遊星が太陽の周圍を公轉する事、月及衛星が地球や各遊星の周圍を廻る事、其他彗星、流星の運動、潮汐の現象及び恒星界に於ける諸星の運動等天體運動の大部分は此法則に據つて行はれる。ニュートンは之に據つてケプラー(Keppler)の三法則に力學的根據を與へこゝに天體力學の基礎を置いた。

## う の 部

ウィクトリア天文臺(Victoria Observatory) 天體物

理學研究のためカナダ政府が同國太平洋岸ウキクトリアに一九一八年に建設したもので、直經七十二吋の大反射望遠鏡を以つて現今は主に恒星界の研究に従事して居る。

ウィルソン山天文臺(Mt. Wilson Observatory)。

米國カリネギー研究部の一部として同國カリフォルニア州ロスアンゼルス(Los Angeles)市の附近ウエルソン山上に一九〇四年建設せられたのであつて海拔六千尺の高所に在る。スノー望遠鏡(Snow Telescope)、高さ百五十尺及び七十尺の塔望遠鏡(Tower Telescope)、直經百吋及び六十吋の反射望遠鏡(Reflecting Telescope)等を設備し、主として太陽の研究をして居る。(一九一九年迄は太陽觀測所 Mt. Wilson Solar Observatoryと稱した)近年恒星、星雲及び星團をも研究するに至つた。創立以來ハーレ(G. E. Hale)氏が臺長である。